

播磨風土記と伊和大神。

新 司 万 紀 子

一

伊和大神は、播磨風土記によく登場する神で、宍粟郡、一宮町伊

和を本居とした出雲系の伊和氏族の奉じた播磨地方の土着の神である。伊和大神は、大國主命（播磨風土記では大汝命、葦原志許乎命）と同一神であるという説がある。これは恐らく、二神の行為、性格に共通したところが多くあるからだと思う。播磨風土記、宍粟郡、波加の条には、

國古めましし時、天日槍命、先に此處に到り、伊和の大神、後に到りましき。（略）

とあり、天日槍命は、大國主命と争っている場合が多いので、ここでは、伊和大神は葦原志許乎命と同一神のようにもみえる。しかし、やはり大國主命は、出雲地方で英雄として崇められている神で

あって、播磨地方の土着の神である伊和大神とは別神であると解釈したい。なお、伊和大神は、ただ「大神」とだけ記されている箇所がいくつもあるが、「日本古典文学大系」では、すべて伊和大神のこととしているので、それに従ってみようと思う。

伊和大神は、「大神」とある、その名のおり、大きな力を持った偉大な神であったのだろう。播磨風土記において、伊和大神以外に、「大神」の名がついているのは、出雲国の阿善の大神、出雲の御蔭の大神、出雲の大神、宗形の大神、住吉の大神らである。阿善の大神は、揖保郡上岡の里、大和三山の争いの仲裁にやってきた神であり、出雲の御蔭の大神、出雲の大神らは、揖保郡、意此川、佐比岡に現われ、いずれも交通妨害をする荒振神である。宗形の大神は、奥津嶋比売命といい、伊和大神の妻である。古事記では、この比売は、大國主命と結婚しており、このことも、伊和大神と大國主命が同一神であると考えられる所以であろう。住吉の大神は、イザ

ナギノ命の禊の時に現われた海神で、草を敷かずして、前代を作るなど、以上あげた大神は、皆やはり比較的大きな力を示している。伊和大神のみ子達も多く登場する（大汝命のみ子は火明命だけ。他に神の系譜は不明とする大御津命のみ子、伊波都比古命がみえるだけである）。

簡磨郡、英賀の里

伊和大神のみ子、阿賀比古、阿賀比売の名により地名とされた。

掛保郡、伊勢野

婦化人が、この野に来る移住者を妨害する神のいる山の麓に社をたてて敬い祭り遂に里を成すことを得た。その山の岑に在す神が伊和大神のみ子、伊勢都比古命、伊勢都比売命で、この野も、この野を流れる川の名も、この二柱の神の名によっている。

掛保郡 美奈志川

伊和大神のみ子、石龍比古命と妹石龍比売命が、川の水をめぐって相争っている。

神前郡 総説

伊和大神のみ子、建石敷命が神前山に在し、その神の在すによりて名となった。

讚容郡、雲濃の里にも伊和大神のみ子がでてくる。他に、伊和大神の妹や妻も、穴禾郡に現われている。このように「大神」と記され

たり、み子神などが多いことは、この神が偉大な神であったことをよく示している。

二

播磨風土記は、現存の五風土記の中でも最も地方色がよくでており、土の色が濃く、古代農民の心を描いている書物である。賀古、印南、簡磨、掛保、讚容、穴禾、神前、託賀、賀毛、美奈の十郡の記事が残っている。赤石、赤穂の二郡の記事は全く欠けており、賀古、印南の二郡の冒頭の部分も脱落している。主として、里名の由来を説いているが、稀には、旧伝、地勢、産物、俗信などを記しているところもある。播磨風土記の勘遺者及び勘遺年は不明であるが、「風土記」を作るよう勅命が下ったのは、和銅六年（七一三年）のことで、出雲風土記の総記の最後に、「右の件の郷の字は靈龜元年の式に依りて、里を改めて郷と為せり。」とあるにもかかわらず、播磨風土記では、「里」の字が使われ、「郷」は使われていないことから、靈龜元年、即ち七一五年以前に成立したであろうことがわかる。播磨風土記には、民俗に関する事項を、どの風土記よりも多く載せており、古代における農村生活や、多種の勢力が渦まいた古代の事情をまのあたりにうかがうことができる。そして播磨は未

開の広野に富んでいた国である。その未開の広野がどのようにして開発されたかも知ることができる。播磨という国は、瀬戸内海に面し、交通の便が良く、古代から東西往來の通り道にあたっていて、神と人が入りまじり、国占め、移住、天皇巡行と、この国にはいつてくる力の交錯する土地であった。背後は美作の国を隔てて、古くから文化的に進歩し、活躍した出雲国に接しているため、出雲方面との往來が頻繁で、出雲の神が常に來り通っていた国であった。

播磨は、海岸の国でありながら、農業、狩りに関する語が多く、海に関する語は少ない。農業というのは、移住民らが未開地を開墾して、村落を作っていく手段である。そしてその開墾説話には、多種多様の農耕呪法が用いられ、農耕儀礼―素材で原始的な―を見ることができると。また海に面していることから、内地人移住と共に外国からの渡來を語る伝説も大変多い。いわゆる帰化人と呼ばれた人達である。この播磨風土記によく見られる最も強大な力をもつ天日槍命も韓国から渡來帰化した氏族の祖である。こうしていろいろな神、氏族が渡って來て、定住地を得たり、あるいは、それがかなえられず追い返されたりしている。

要するに、この国は古代交通の大きな道筋にあって、各氏族の渦を成し、それらの人々の間に国占めの闘争が入り乱れて語られたり、交通の妨害をする荒振神の説話も多い。これからみて、播磨風

土記は、一種の移住史をなしているといえるのではないだろうか。

播磨国内での移住もあるが、やはり他国よりはいつてくるものの方が多い。但馬、出雲、石見、讃岐、伊予、筑紫、河内、大和など四方から、更に海の方からは、漢人、韓人、新羅人、百濟人、呉人らがいる。そして彼らは帰化人と呼ばれた。内地人の移住説話が23、帰化人の移住説話が22ある。移住は容易に行なわれたわけでは決してない。行人を遮えぎって、その半数を殺す荒振神、移住を邪魔する先住神などがある。移住者は、こうした荒振神を和め鎮めねばならなかった。また移住民は土地をめぐって、あるいは奉ずる神の違いなどから先住民とも闘わねばならなかったことだろう。先住民と闘い、これを追い払うことのできた移住者達は、土着し繁殖するに従い、自分達の間にも、土地、収穫をめぐって争いがあったのではないだろうか。内地人の移住についていうと、23の説話のうち、播磨国内からの移住説話が3、移住者の名がそのまま土地の名となっており、移住者の名ではなく移住者ごとに住んでいた土地、村(木店うきみせ)の名がそのまま移住先の地名となっており、移住者の祭った神の名によって地名となったところが2、また神の移住も少なくなく4、その他、といった具合である。移住した地に木居の村の名をそのままつけたり、木居で祭っていた神を新しい移住地でも祭り、その名をつけることによって、

彼らの本居を再現し、移住を完全なものにしようとする気持ちがあったのではないだろうか。

移住したあと問題となるのは開墾である。移住さえしてしまえばそれで良いというわけではない。移住して、そこに住みつくという意図目的の下には「土地を開墾する」という行動があらねばならないのである。荒振神や先住神に妨害され、苦勞しながらやっと得た、その新しい土地を生活できるよう開墾していかねばならないのである。播磨という国においては、その意味で、移住よりも開墾が土地の歴史の始まりといえるのではないだろうか。(もちろんその開墾を多く行なったのは当然移住者である。)

開墾説話は18ある。そのうち天皇が命じて開墾させたという話が6ある。播磨が未開の広野に富み、交通の中心地にあたっており、また、まわりに比較的文化の発達した出雲などの国があれば、為政者がこの地に特に大きな関心を持ったことは当然であろう。播磨風土記には、実に驚くべきほど多くの天皇が登場しており、それを物語っているようである。特に応神天皇は47回も登場し、多くが国状視察である。

三

古代にあっては、土地こそが唯一の生産手段であった。人は昔から、その生活を豊かにしたいという欲望を持つものであり、それは今も変わらない。当時、こういう欲望を満たすためには、土地を占居し、開拓し、そこに収穫を求める以外にはなかった。従って土地

郡	里	内容
① 掛保	香山里	国占め
② "	阿豆村	国土巡行
③ "	林田里	国占め、土地占居の表示
④ 讃谷	総説	妹神との土地占居争い、占居せず去る。
⑤ "	玉落川	大神の服飾の玉が、この川に落ちたことからこの名がついた。
⑥ 讃谷	笠戸	国占め、占居せず去る。
⑦ 穴末	総説	国土経営
⑧ "	比良美村	大神の裾がこの地に落ちたこととからこの名がついた。
⑨ "	庭音村	大神の乾飯が水に濡れてカビ(酒母)がはえたため酒を醸さしめて庭酒に献つて宴した。
⑩		大神がこの岑で稲をついた。
⑪		大神の妻訪い
⑫		国占め
⑬		天日槍命との国占め
⑭		土地占居の表示
	御方里	
	波加村	
	伊加麻川	
	安師里	
	稻脊岑	

- ⑮ 伊和村 大神、酒を此の村に醸みましき。
 ⑯ 於和村 国作りを終えて鎮座
 ⑰ 神前 榎岡 天日槍命との争い

をめぐつての争いが盛んに行なわれたのである。未開の広野に富んでいた播磨には、交通の便の良さも手つだつて、移住、開墾説話と並んで多いのが国占め説話である。そして伊和大神も、多く国占めを行なった神である。

国占め説話は、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩であり、大神の説話の約半分を占めている。しかし、争つて国を占めているのではない。⑪⑫は全くどこかといって取りあげるほどのこともない単なる国占めである。争いもしていなければ、占居表示もしていない。競争者がいないのである。⑬は「伊知の大神、国占めましし時、鹿来て山の岑に立ちき。(略)」とあり、移住開墾のための領土の発見をいっている。

⑭にしても「大神、国占めましし時、鳥賊此の川に在りき。故、鳥賊間川といふ。」とあるだけである。⑮⑯も競争者のいない単なる国占めであるが、ここでは占居表示をしている。⑰では、国を占める時、杖、木、樺の如き御志をたてている。⑱では、これには地名由来が二説あり、一説が葦原志許乎命と天日槍命との腕くらべともいえるような国占め争いで、他説が「一ひといへらく、大神、形見と為て、御杖を此の村に植てたまひき。故御形といふ。」とあ

り、土地占居の標示として杖を立てている。杖を立てることは、土地の占有の儀礼で杖は占有の標識なのである。また、ここでは、杖が神の依り代で杖のある所は、神の占める所ながゆえに、杖が占有標識になることを示している。⑲⑳は占居しようとして、それがならず他所に去っている。㉑では、大神が妹神と国占めを競い合い、妹神が先に占居したとなると、すぐおとしく他の地へ去っている。㉒の説話も、天日槍命が先にこの地に到り、大神は後で来た、そこで大神は、「度らざるに先に到りしかも」といっているだけで、争いはしていない。㉓では、競争者がいない国占めのだが、この地で鹿の肉を食べようとして、それが口にはいらず地に落ちた。そこでやはりこの地を去って他に選んでいるのである。

このように大神は少しも争っていない。播磨風土記には、大神の国占め以外にも多くの国占め説話があるが、その多くが、争つて国を占めている。葦原志許乎命は常に天日槍命と国占めを競つて争っている。他の神においてもそうである。普通、国を占めると言う行為には、争いがつきものなのではないだろうか。だのに大神は少しも争っていないのである。

そこで大神の国占めと、他の神の国占めを比較してみると次のようになる。

大神の国占め

讃容郡 総説(大神の表④)

讃容といふ所以は、大神妹妹二柱、各競ひて国占めましし時、妹玉津日女命、生ける鹿を捕り臥せて、其の腹を割きて、其の血に稻種まき。仍りて、一夜の間に、苗生ひき。即ち取りて殖殖しめたまひき。爾に、大神勅りたまひしく、「汝妹は、五月夜に殖殖するかも」とのりたまひて、即て他処に去りたまひき。故五月夜の郡と号け、神を贊用都比売命と名づく。(略)

他の神の国占め

掛保郡 美奈志川

美奈志川と号くる所以は、伊和の大神のみ子、石龍比古命と妹石龍比売命と二はしらの神、川の水を相競ひましき。妹の神は北の方越部の村に流さまく欲し、妹の神は南の方泉の村に流さまく欲しき。その時、妹の神、山の岑を踰みて流し下したまひき。妹の神見て、非理と為し、即て指櫛を以ちて、其の流るる水を塞きて、岑の辺より漕を聞きて、泉の村に流して、相格ひたまひき。爾に、妹の神、復、泉の底に到り、川の流れを奪ひて、西の方桑原の村に流さむとしたまひき。ここに妹の神、遂に許さずして、密樋を作り、泉の村の田の頭に流し出したまひき。此に由りて、川の水絶えて流れず。故、无水川と号く。

讃容郡、総説の大神の国占め説話で、妹神が行なったのは、鹿の生血を苗代として稲種をまくという、早く発芽させる呪術的な播種法であり、水田に早く苗を植えたものが勝利を得、その田(土地)を占有するのである。そして大神は、占有し得ないで、また、それに対して戦うこともせず、おとなしく他の地に去っているのである。掛保郡、美奈志川の伊和大神のみ子の国占めでは、この二柱の神は、土地占居の神として語られている。これは、水田灌漑のため水争いで、水争いというのは、とりもなおさず土地占居の争いである。農業を営むにあたって、灌漑ということが最も重大なことであった。従って、この水争いはかなり深刻な争いであつたにちがいない。妹の神が山の岑を踏んで低くして北方の越部の方へ流れるようにしたことに対し、妹神は「指櫛」を用いて水を塞き止め泉の村に流そうとしている。妹神は、泉の村に流そうとすることに終始一貫しているが、妹神は、はじめ北方に流そうとし、それがダメなら次は西の方へ流そうとして、とにかく泉村へは流させまいとして妹神を妨害しているのである。「指櫛」というのは、頭髮に挿している櫛で、神秘的な呪力のあるものとして扱われている。イザナギノ命の黄泉国訪問の時には、イザナミノ命から逃げる時の障害物に使われている。櫛には、ものを断つという力があるのだろうか。

昔、特に古代において、髪は女の命であった。その髪にさす飾には女の魂がこもっていたのであろう。とにかく妹神は、妹神と争って、暗渠を作り、川の水を地下に流すようにしたため、川の水は絶えて流れなくなつたのである。

このように、大神は、占厝できないとなるとおとなしく他所に去っているのに対し、石龍比古命と石龍比売命は、かなり激しい国占め争いをしてゐる。しかし、国占めのため争うのは、何もこの二柱の神に限られたことではない。他の神―大國主命と天日槍命―においてもそうなのである。み子神になると他の神のように争ってくるが、大神自身は少しも争わないのである。

では、少しも争っていないところからみて、大神は、もともとおとなしい神なのであろうか。「大神」という名からみて、臆病な神であったとは思えない。播磨は、未開の広野に富んでいた国で、移住、国占めがことのほか多かつたため、大神はもうかまわず放つておいたのであろうか。

四

ここで注目したいのは、大神の妻⑩の妻訪いである。この妻訪いのところで、はじめて大神の荒々しい、大きな力がでている。

六采郡、安師川

大神、此処に凜しましき。故、須加といひき……今、名を改めて安師と為すは、安師川に因りて名と為す。其の川は、安師比売の神に因りて名と為す。伊和の大神、婆訛せむとしましき。

その時、此の神、固く辞びて聴かず。ここに、大神、大く頤りまして石を以ちて川の源を塞きて、三形の方に流し下したまひき。故、此の川は水少し。(略)

大神が妻訪いした安師比売は、大神の求婚を固く拒否して聞かなかった。妻訪い婚というのは、女性にとつては大変不利で、男性がくるのをじっと待ち、求婚されるとはじめは拒み隠れはしても、いつかは男性に従わねばならなかったはずである。また特に、伊和大神という偉大な神であるとなおさらである。しかし、この安師比売は最後まで固く拒んで大神の求婚を受け付けなかつたのである。これによく似た話に、仁徳天皇と女鳥王の話がある。女鳥王も絶大な権力を持っていた仁徳天皇の求婚を拒否するのである。安師比売というのは、神の系譜は不明であるが、おそらく土地の主長としての巫女神であらう。(大系本注)そして、アナシヒメの「アナ」は「アヤ」に通じ外来の「アヤ」の女神、あるいは巫女であり、外来の女神「巫女」は在地神の神妻となることを拒絶したのであらう。求婚を拒絶さ

れた大神は、大いに怒り、安師川の水源で水の南流を塞ぎ止めて、南方に流れるべき水田の灌溉用の水を北方に流し、農耕の邪魔をしたのである。今まで、一度も荒々しい行為を示したことがない大神がである。しかし、これは結婚という問題がからんでいるからである。 「大神」として、偉大な神として、農民から尊敬され、慕われていた大神にとっては、安師比売の拒絶は、考えられないことであり、また、「大神」として面目まるつぶれというところではないだろうか。だからこそこのような荒々しい行動にでたのである。やはり本来はおとなしい神なのではないだろうか。

五

前の表をみてもわかるように、国占め説話以外にも、大神の説話は大変多い。このことから、播磨においては、偉大な神であると同時に、古代農民に親しまれた比較的人気のあった神なのである。②③では国占めではなく、国土を作る、あるいは経営をしている。⑦では、国土を作り堅め、統治主権者の仕事として、山、川、谷、尾（嶺）の自然地形によって、国の境界を決め、⑧と同じように、国土を巡行し（この⑧も国占めのための巡行ではない）⑨では国作りを終えた大神は、「於和。我が美岐に等らむ」といって鎮座して

いる。この「おわ」というのは氣力が抜けて、仮死状態にあるのを「ヲエ（瘁・瘼）」というのに通ずる語で、神が活動を終えて、鎮座（死の状態）しようとすることを示す語であろう（大系水注）。即ち、大神のことばは、ここを神の鎮座地として、鎮座して見守ってしようというのである。⑩では天日槍命と争っている。「伊和の大神と天日槍命と二はしらの神、各、軍を發して相戦ひましき。その時、大神の軍、集ひて稻舂きき。」（略）」とあり、この争いは国占めの争いかどうかわからない。そして、その争いは、これ以上のことは記していない。「一ひといへらく」として、伊和大神が、天日槍命の軍を防ぐために、城を掘ったと伝えている。⑪でも、「大神、此の岑に舂かしたまひき」とある。

これらの説話からみて、大神の性格として次のようなことがわかるのである。大神には、農耕生活神としての性格がある（⑩⑪）。稲を舂き、酒を醸み（⑫）、ここに農耕生活神、農神としての大神の姿がある。大神が農業神であるからには、国占め、即ち耕すべき地が求められ占められねばならない。だから大神は、国占めをも行なう神なのである（①②③④⑤⑥⑦⑧⑨）。しかし、決して争わないおとなしい神である。この中で国土を占居せず去る（④⑤）というのは、巡遊する神でもあるのだろうか。それとも、大神は、掛保郡や、穴禾郡の各

地など、多くの土地を占有したが、讃容郡にだけは、その勢力が及ばなかったであろうか。また、大神は、国土を作り、国土を経営する神(⑧⑨)であり、境界を定める神(⑩)であり、国土を巡行する神(⑪⑫)である。このように、極めて複合的な性格を有していることがわかる。また、天日槍命と軍を發して戦う神(⑬)でもあるが、これ以外は、ほとんど争うということをしていない。斐訪い(⑭)のところでは荒々しい行動をしているが、前に述べたように、それは結婚という問題がからんでいるからであろう。国占めのところでも、決して争わず、占居できなければおとなしく他の地へ去るというのは、臆病というのではなく、もともとおとなしい神なのであろう。古代の播磨の人々に尊敬され、親しまれる人気のある神であり、決して恐れられるような神ではなかったであろう。